

香取遺産

Vol.115

虚無僧墓
こむぼうはか

一つの生き方を物語る墓

閩生涯学習課

☎(50)1224



▲虚無僧の墓



▶梵論塚
ぼろんつか



▶薦僧塚
こもぼうつか

新里大久保から多古方面へ通ずる街道沿いの大角地区に「虚無僧墓」として伝説と信仰を伝える墓があります。

墓には、二十数基の大きささまざまな石塔が散在しており、梵論塚ともいわれています。

石塔には「梵論塚」「薦僧塚」「梵論大権現」「普化祖霊神」などの文字が見うけられ、江戸時代後期の天保二年（1831）のものが一番古く弘化、嘉永、明治などの年号が刻まれています。

梵論は半僧半俗の物乞いの一種で、鎌倉時代末期に発生しました。室町時代には尺八を吹いて物を乞う薦僧が現れ、のちの虚無僧となったと言われています。虚無僧は禅宗の一派である普化宗の僧で、喜捨を請いながら諸国を行脚した有髪の僧とされ、天蓋と呼ばれる深い編笠をかぶり袈裟を掛け尺八を吹くという独特ないでたちをしていました。また、中には生活に困窮した浪人や、罪人、帯刀した者も多くいたようです。

「天保の初年頃、一人の虚無僧が小川村名主であった高橋家に一夜の宿を請うた。翌日、一管の尺八を礼として旅立ったところ、新里大街道地先にて目指す敵に出会い、切り合いに及んだ。しかし刀が折れ、返り討ちになったため、里の人々がねんごろに葬った」と伝えられています。このことが、いつしか信仰と結び付き、墓前に刀を供え霊を慰めることにより、願いがかなうと信じられるようになったのかもしれない。

虚無僧がなぜ敵と切り合わないればならなかったかは分かりませんが、仇討などが制度化されていた時代に虚無僧となって敵を追っていた当時の社会の一つの生き方を伺い知ることが出来ます。

刀を供えることで僧に目的を遂げさせてあげようという人々の気持ちが信仰となり、現在まで残されてきました。

昭和56年9月22日に市文化財に指定されました。